第19回金融教育に関する実践報告コンクール

優秀賞

規格外野菜の販売体験を通した金融教育のスタート

～「食品ロス」に対する総合的な学習の時間の取組～

東京都・武蔵村山市立第十小学校 副校長　今井 一馬
教諭　比留間 雄大
教諭　久保田 萌海

知るぽると
www.shiruporuto.jp
© 金融広報中央委員会 2022

1. 児童の実態から見えた課題

放課後の職員室には、地域から様々な連絡が寄せられる。その中には、児童に関する問題行動も含まれるが、「お菓子などのおごり、おごられ」に関するものが目立つ。家から持ってきたお金でお菓子などを買い、公園で友達にふるまってしまうものである。おごる側もおごられる側も、金銭的なやり取りに発展していることを十分に理解できておらず、その後の友達関係にも悪影響を及ぼしている。家庭の大切なお金を使っているという認識と、それを使って相手に恩を売ってしまっているという理解が十分ではない。

これらの問題行動については、生活指導夕会などで共有し、それに対する指導を学級や学年、さらには全校に向けて行ってきた。また、保護者会や個人面談などを通して、保護者にも協力してもらえるよう啓発してきている。しかしながら、ここ数年にわたって、その件数が減少に転じることはなかった。

これは、児童がお金やそれを使って購入する商品の価値について、理解できていないことが要因であると考えた。その根本的な解決に向けて、「児童による販売体験プロジェクト」を進めることにした。その実行までの過程について、以降に述べていく。

2. 児童による販売体験の設定

（1）行事の改編から枠を生み出す

コロナ禍により、学校行事は大きな転換点を迎えた。制約の中で実施していくために、縮小・改編などを迫られたが、デメリットばかりではなかった。必要のない行事を精選したり、無駄な業務をカットしたりするメリットも生まれた。

そのメリットを生かし、児童による販売体験を、令和４年度の行事予定に設定することを試みた。以下に行事の改編について示す。

令和３年度まで

７月　親子夏まつり

ＰＴＡ主催の行事で、大人が企画・運営する遊び場に児童が参加する。（令和２・３年度は、コロナ禍により中止となっていた。）

１０月　チャンピオン大会

学校主催の行事で、児童が運営する競技形式のコーナーに児童が参加する。各競技の結果から、全校チャンピオンを決定する。

⇒

令和４年度から

７月　十小夏まつり

学校・ＰＴＡの共催とし、「親子夏まつり」と「チャンピオン大会」を合わせ、児童が企画・運営する行事に刷新した。チャンピオン大会の競技要素は残しつつ、５・６年生には新たにマーケットエリアを体育館に設定した。（資料１）

このようなコロナ禍の行事改編により、児童による販売体験を通した金融教育をスタートさせることができた。

（2）実行に向けた障壁

この新たな企画の遂行は、必ずしも順風満帆であったわけではない。いくつか乗り越えなくてはならない障壁も存在した。ここでは、その中の２点について述べる。

①教職員の共通理解

新たな企画を提案すると、必ず反対意見も投じられる。この企画に関しても、「現金を授業で扱わせるのは、小学校段階では早過ぎる。」という意見も寄せられた。これに対しては、資料（資料２）をもとに次のような内容を教職員に説明し、企画の必要性と金融教育への理解を求めていった。

▷　今年から18歳成人となり、早い段階からの金融教育が必要であること。
▷　小学校⇒中学校⇒高等学校の流れの中で、小学校ではまずお金や商品の価値を理解する必要があること。
▷　金融教育を進める教科などとして、特別活動・道徳などがあるが、小学校段階としては、体系的・体験的に学ぶことができる総合的な学習の時間が適していること。
▷　総合的な学習の時間の販売体験の機会として、保護者も参加する十小夏まつりが最適であること。
▷　活動を通して、消費者教育やキャリア教育、SDGsに関連する教育まで、幅広く学習効果を高められること。

© 金融広報中央委員会 2022

②売買時のお金の管理

児童の実態からか、売買時のお金の管理についても心配の声が上がった。児童を信用しないわけではないが、各コーナーに大人の目は必要だという結論に達した。

しかしながら、コーナー数は教職員の数をはるかに上回り、学校側だけでは管理しきれない状況であった。そこで協力依頼をしたのが、ＰＴＡである。ＰＴＡ会長に相談したところ、快く引き受けてくださり、あっという間に全コーナーを含めた当番表まで作ってくださった。担当してくださる方々に対しても、教職員同様に丁寧に説明することで、行事の趣旨や仕事内容についてご理解いただけた。販売コーナーに関しては、児童によるお金のやり取りを当番の方に見守っていただき、最終的な売上金を職員室の金庫まで運んでもらうこととした。

また、ＰＴＡには商品製作の資金（各学級１万円）も出資していただき、それをどのように使っていくかは各学級で話し合う流れとした。これにより「原材料費に付加価値や利益などを付け、商品の値段をいくらに設定するか。」など、商品価値に迫る学習を展開できると考えた。

反対意見や心配する声に対して、丁寧に説明したり、課題解決したりしていくことで、教職員・ＰＴＡなどの理解が得られ、企画自体もより洗練されていくことにつながった。

３．６年生による規格外野菜の販売体験

販売体験の舞台は整ったが、肝心の中身を創り上げていくことは、５・６年生の担任にとって大きなチャレンジであった。ここでは、６年生の総合的な学習の時間の取り組み過程を紹介する（資料３）。

（１）学習テーマ（課題）の設定

総合的な学習の時間では、児童が現状から学習テーマ（課題）を見いだし、主体的に課題解決を行っていく。そのため、教師から「販売体験を行うには……」というように、当初から働きかけることはできない。児童の思いや願いを大切にしながら、学習展開の中で何を販売していくかを模索していく必要があった。

テーマを決めていく過程で、児童は５年生の社会で農業などの各種産業を学んだ経験から、食品が廃棄される「食品ロス」の問題に取り組む方向で進んだ。

まずは食品ロスの概要を理解する必要があるため、図書室の書籍やインターネットなどを活用して調べ始めた。その中で、以下のような現状が見えてきた。

▷　世界で年間約13億トンの食品が廃棄されており、世界の食品の約３分の１が捨てられている計算になる。
▷　食品ロスの影には、環境破壊や貧困改善の停滞など、様々な問題が潜んでいる。
▷　日本の食品ロスは、年間推計約612万トン（2017年）であり、これを一人当たりに換算すると、毎日ごはんお茶碗（わん）１杯分を捨てているという計算になる。
▷　日本の食品ロスのうち、事業系の廃棄量が328万トン、一般家庭の廃棄量が284万トンであり、生産者と消費者の双方に課題がある[注)]。

（２）自分たちができる活動の設定

食品ロスの概要が見えたところで、自分たちができる具体的な解決方法を考え、次のような意見が出された。

Ｔ：「食品ロス」を少なくしていくためには、どうしていけばいいと思う？

Ｃ：作りすぎないようにすればいいのでは？
Ｃ：食料が十分ではない国に送ってあげればいいのでは？
Ｃ：冷凍とかして、食べる時まで保存しておけばいいのでは？
Ｃ：捨てられている形の悪い野菜などを、使うようにすればよいのでは？

このような交流をしていく中で、外国に持っていくには輸送費がかかったり、保存するためには電力などのエネルギー

© 金融広報中央委員会 2022

が必要だったりすることを知り、できる限り「地産地消」で解決していくことが大切であることを学んだ。地域に目を向けてみると、学校の周りにはまだまだ多くの畑が残っており、給食にも地域の野菜が使われるなど、野菜の生産が盛んであることに気付いた。

そこで、地域で生産される野菜について調べ、その消費についてなるべくロスがない方法を考え、活動していくことになった（写真１）。

（３）地域の農家の方から学ぶ

３年生の社会では、地域の畑に見学に行ったことがあり、多くの児童はその時の経験を覚えていた。そこで、地域の農家の方に児童自身が電話でアポイントメントを取り、学校で地域野菜の現状について教えてほしいと依頼した。

農家の方は快諾してくださり、児童は初めて規格外野菜の現状について知ることになった（写真２）。規格外野菜は、「小さ過ぎる」「大き過ぎる」「形が悪い」などの理由で店頭に並ばず、捨てられているということだった。できる限りＢ級品として売る努力をしているが、小さな農家ではＢ級品を流通させるルートがないことも悩みとしてあがった。

児童からは「規格外野菜は味が違うんですか？」という質問が出され、農家の方からは「味は全く変わらず美味しいけれど、小さ過ぎると調理がしにくいし、大き過ぎると使い切れないなどの理由で食べてもらえない。」と教えていただいた。児童は、美味しく食べられる野菜が捨てられている現状に、強く課題意識を持った。

（４）規格外野菜の販売体験

農家の方から学んだことで、「規格外野菜の廃棄をなくしたい。」という思いが固まり、その解決方法としては「規格外野菜の販売」という方向で進んでいった。規格外野菜の調達については、授業をしていただいた農家の方に加え、児童のアポイントメントによりさらに２軒の農家が協力してくださることになった。

しかし、販売した経験が全くない児童にとっては、ここからが大変である。お店のレイアウトや各種表示、商品の値段決定など、未知の領域に戸惑いながらも、普段の授業では味わえない課題にワクワクしながら取り組んでいた。特に野菜の値段の決定に向けては、まずは近所のスーパーで野菜の価格自体を調べる必要があった。お家の人と買い物に行く時に、野菜の価格をメモしてくる児童がたくさんおり、グラム当たりで金額を設定する根拠となった。児童にとって、商品やお金と真剣に向き合う初めての機会となった（写真３）。

十小夏まつりの前日には、日持ちしやすい根菜類の袋詰めを行った。算数で使っていたはかりを用い、重さや個数を考慮して詰めていった。そして、値札を付けて、販売に備える。スーパーに並んでいる野菜と同じように、自分たちでビニール袋に詰めるだけでも、お客様に買ってもらう商品を扱っている緊張感があった（写真４）。

その他の日持ちしにくい野菜については、当日朝の袋詰めとなった。お店のレイアウトや表示などをすべて終わらせておき、当日に備えることとした。

当日は、６年生全員で朝から袋詰めに追われたが、児童は農家の朝の忙しさを体感することができた。新鮮な物を消費者に届けるための工夫を、作業しながら感じることができた。最終的に店頭に並んだ野菜は、次のとおりである。

○じゃがいも	○玉ねぎ	○かぶ	○かぼちゃ	○ピーマン
○長ねぎ	○トマト	○きゅうり	○キャベツ	

いよいよ販売時刻となった。最初のうちは、買い手となる保護者も様子を見ている状況であったが、児童の呼び込みにも誘われて、続々とお客さんが来店するようになった（写真５）。販売コーナーでは、規格外野菜の現状を知ってもらうためにプレゼンで説明したり、その野菜が美味しく食べられるように手作りのレシピを添えたりし、付加価値を高めていった。

販売体験をしていると、児童は早くなくなってしまう商品と、そうではない商品があることに気付いた。この時期は、玉ねぎが高い時期であったので、玉ねぎはあっという間に完売となった。需要と供給の関係を、体験を通して学ぶことができる貴重な機会となった。

お金のやり取りに関しても、初めはとても緊張していたが、徐々に慣れてきて「○○円いただきましたので、おつりが○○円になります。」などの言葉も自然と出てくるようになった。現金を扱うことで、程よい緊張感に包まれながら、商品とお金の関係について学ぶことができた。

体験を終えた児童は、野菜を提供してくださった農家に対し、売上金額などの報告と感謝のメッセージを送り、１学期の学習をまとめることができた（写真６）。

© 金融広報中央委員会 2022

４．金融教育から起業家教育・まちづくり学習へ

十小夏まつりが１学期終了直前の開催であったため、売上金の使い道や次への取り組みについては２学期へと続いている。このように金融教育の場を学校行事に設定したり、総合的な学習の時間に組み込んだりすることで、学校には新たなネットワークや構想が広がっている。（資料４）

（１）地域の農家とこども食堂との連携

本校の学区域に、10月からこども食堂がオープンする。児童たちの多くは、すでにプレオープンイベントに参加しており、オープンを心待ちにしている。食堂では野菜などの食材を必要としており、今回６年生が関わった農家との連携を進めている。食品ロスや運営経費を少なくする目的のほか、地産地消で地域のネットワークを作っていくことで、食堂に様々な方々が集うようになると考える。

（２）近くのスーパーマーケットやショッピングモールとの連携

学校の近くのスーパーマーケットには、３年生の時に見学に行った経験もあることから、食品ロスを少なくする工夫を教えてもらっている。また、市内のショッピングモールには様々なお店があるが、その中に今回の取り組みでも扱った規格外野菜を販売しているお店もあることが分かった。「そのお店がなぜ規格外野菜の販売を始めたのか？」という問いを入り口にして、モール内の多種多様なお店のロス削減の工夫に迫っている。

（３）小・中・高とつながる金融教育の連携

学校の近くには、幸いなことに中学校と高等学校があり、これらの学校とは児童会・生徒会サミットという形で交流が続いている。18歳成人が始まった今年度、高等学校では様々な教科などで金融教育がスタートした。しかしながら、今の高校生にはそれまでの積み重ねがあまりないため、基礎的な内容から教えざるを得ないという。

高等学校の金融教育に向けたスムーズな接続のためには、小学校・中学校の段階で何を身に付けさせるかを明確にしておく必要がある。小学校では、今回のような販売体験を通して、商品やお金の価値について理解する。中学校では、職場体験に向けて、各職業の詳細やそれらのつながり（社会的分業）について理解する。このような小・中・高の系統性を各校で共通理解することで、18歳成人までの金融教育プログラムを作ることを目指している。

（４）東京都小中学生起業家教育プログラムへの参加

今年度の金融教育のスタートをきっかけに広がった様々な企業などとのネットワークを生かし、現在は東京都の起業家教育プログラムに参加している。今年度は、出前授業の実施に留めているが、来年度は年間を通した学習プログラムへのレベルアップを図る予定である。

（５）武蔵村山市のまちづくり学習の推進

武蔵村山市教育委員会では、今年度から「持続可能なまちづくり」を推進していくために、まちづくり学習を実施している。未来の市を担う児童たちが、この地に魅力を感じ、伝統を継承したり、新たに起業したりする流れからまちづくりを後押ししていきたい。

（注）

農林水産省「aff 2020年10月号」

URL https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2010/spe1_01.html

© 金融広報中央委員会 2022

資料１　十小夏まつりイベントマップ

※左上のマーケットエリア（体育館）に５・６年生の販売コーナーを集約した。今回は、買うことができるのは、保護者のみに限定した。

資料２　教職員に向けた説明に用いた資料

OJT・業務効率化⑥

令和４年４月２７日（水）
第十小学校　副校長

お金に関する教育（金融教育）の必要性

【１　ねらい】

18 歳成人引き下げに伴い、小学校段階においてもお金に関する教育（金融教育）を着実に進める。

児童には、お金の価値を実感させ、お金をしっかりと扱う態度を身に付けさせる。

【２　これまでの金融教育の流れと課題】

【小学校】教科等で若干行う　⇒　【中学校】職場体験をする　⇒　【高校】貯蓄や投資を学ぶ

内容のつながりや系統性がほとんどなく、18 歳までにお金の価値や運用について理解できない。

※本校では、家庭からお金を持ち出しておごったり、万引きをしたりする事例があり、お金の価値が理解できていない実態がある。

【３　これからの金融教育のために小学校ができること】

「小学校では、体験的な学習などを交えてお金の大切さを実感させ、中学校では金融の中身を知識として整理する。そして、高校では自分の人生や社会との関わりの中で、金融をどのように活用していくか、問題解決的に学ばせていく。」

◎小学校で金融教育に関わる内容には、どんなことがあるでしょうか？

特別活動

道　徳

各教科等

「金融教育」をテーマとした総合的な学習の時間

「十小夏祭り」は、これまで断片的に学習してきた内容を生かしながら、保護者や地域の協力のもと、体験的にお金について学ぶことができる貴重な機会となる。

【４　関連するキーワード】

○消費者教育　○キャリア教育　○食育　○SDGｓ　など

これらの関連分野を生かしながら、18 歳までにお金の価値や利用について学べるようにしたい。

出典：金融広報中央委員会「金融教育プログラムー社会の中で生きる力を育む授業とはー」

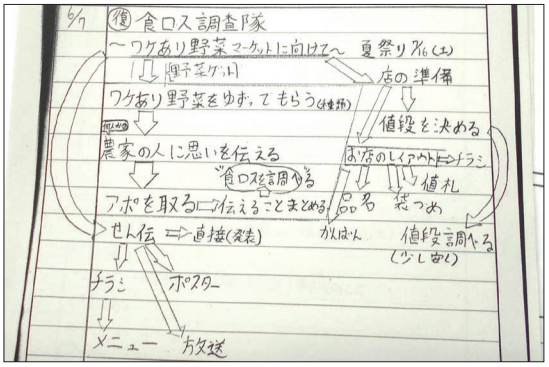


写真１　児童の考えたワークフロー図

写真２　地域の農家の方から話を聞く児童

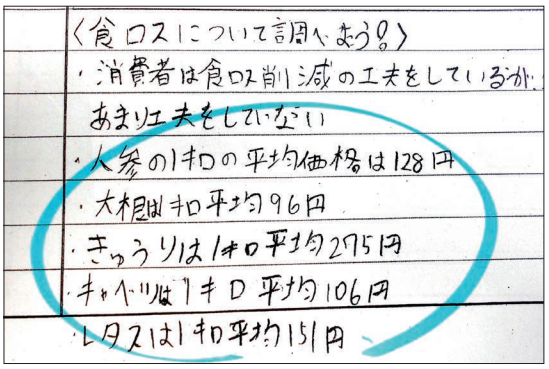
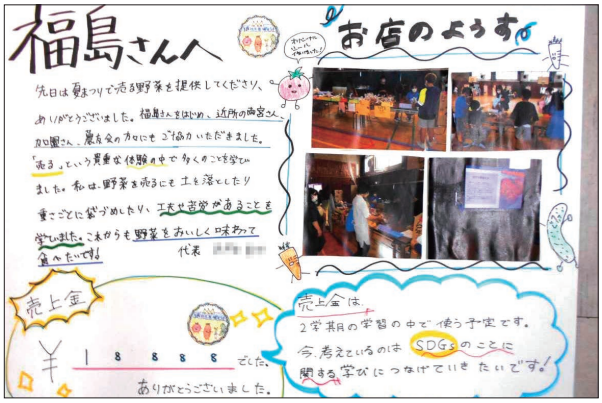


写真３　野菜の価格を調べた児童のメモ

写真４　協力して袋詰めをする児童

© 金融広報中央委員会 2022

写真５　規格外野菜の販売体験を行う児童



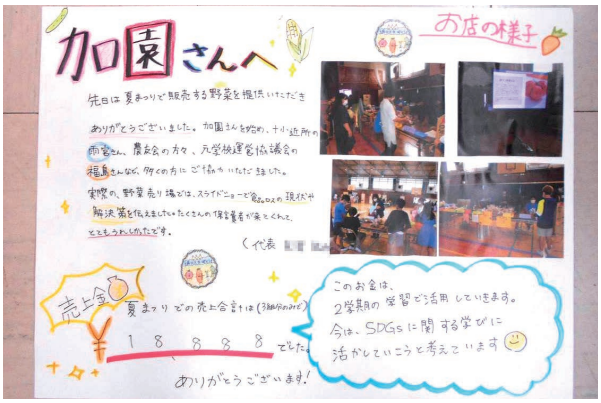


写真６　野菜提供農家の方への報告書等

© 金融広報中央委員会 2022

資料３

第６学年　総合的な学習の時間　学習指導案

１　単元名　「Let's Reduce Food Loss」

小単元１「十小夏まつり編」

小単元２「情報発信編」

２　単元の目標

食品ロスの問題について現状や要因を調べ、解決に向けた活動をすることを通して、食品ロスの問題が、自分、家族、地域の人、一人一人の考え方や日常生活における行動と深く関わっていることに気付き、学んだことを自らの生活や行動に生かそうとすることができる。

３　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に取り組む態度
①「生産」「加工」「流通」「消費」の各過程で起きている食品ロスについて、その現状や要因を理解している。 ②食品ロスの現状や要因について調査したり、身近な人にインタビューしたりするなどして収集した情報を整理し、図や文章でまとめる方法が分かっている。 ③食品ロスの問題が、自分や家族、地域の人、一人一人の考え方や日常生活における行動と深く関わっていることを理解している。	①食品ロスの問題から課題をつくり、解決に向けて自分にできることを考えている。 ②食品ロスの問題を解決するために必要な情報を、手段を選択して収集している。 ③食品ロスの問題に、校内、家庭、地域が共に取り組めるようにするために必要な情報を取捨選択したり、複数の情報を比較したり関連付けたりしながら解決に向けて考えている。 ④伝える相手や目的に応じて、自分の考えをまとめ、適切な方法で表現している。	①活動を通して、自分と食品との関わりを見直そうとしている。 ②課題解決の状況を振り返り、あきらめずに食品ロスの問題の解決に向けて取り組もうとしている。 ③食品ロスの問題の解決に向けて、友達や関係する人たちの意見や考えのよさを生かしながら、協働して課題解決に取り組もうとしている。

４　年間指導計画における位置付け

国語	（６）「私たちにできること」
社会	（４）「人々の健康や生活環境を支える産業」 （５）「我が国の農業や水産業における食料生産」
理科	（５）「植物の発芽、成長、結実」
家庭	（５）「調理の基礎」「物や金銭の使い方と買物・環境に配慮した生活」
算数	（５）「割合」
総合	（６）「キャリア」

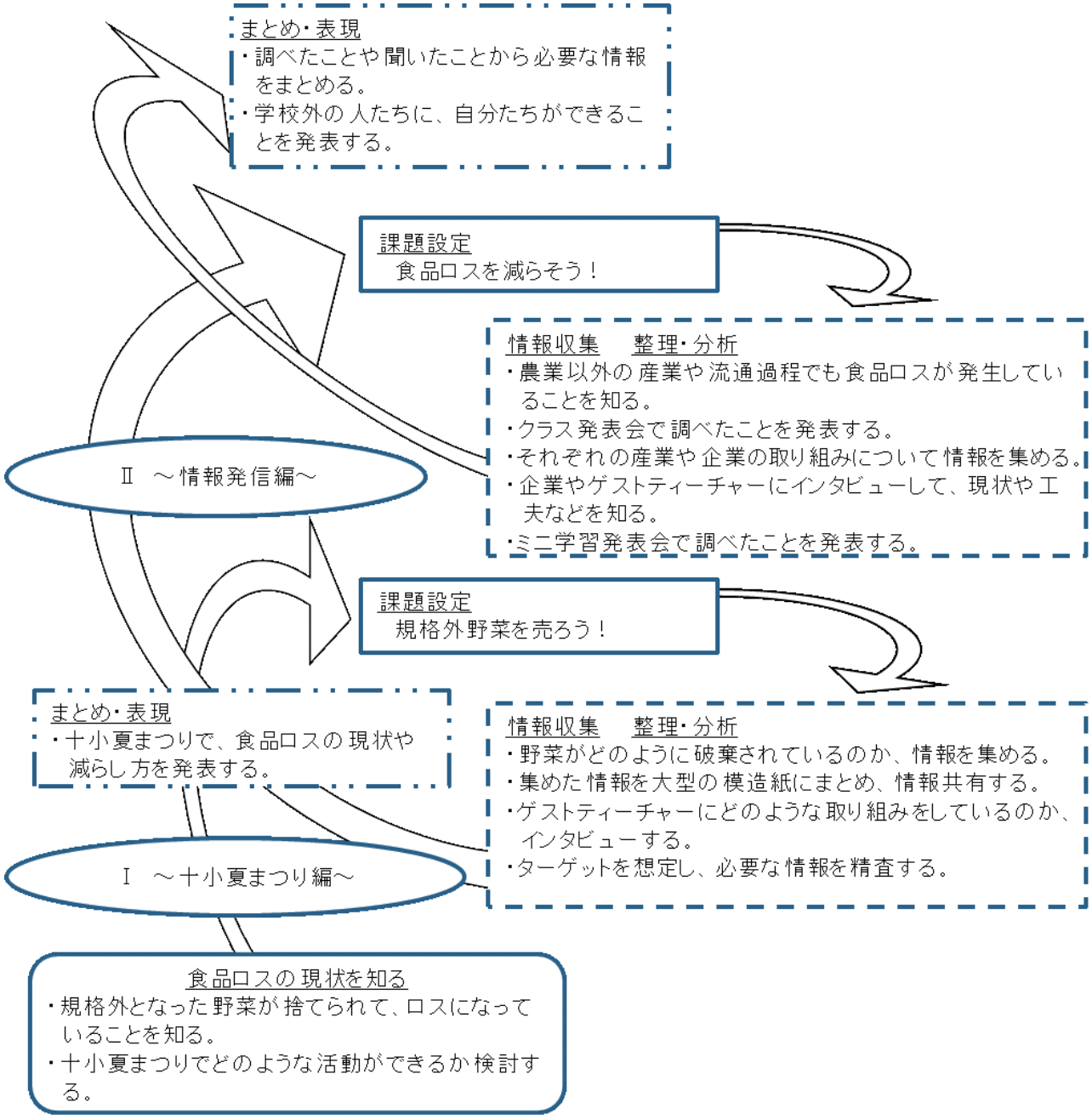
© 金融広報中央委員会 2022

5　単元の指導計画と評価計画（55時間扱い）

小単元名（時数）	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
1 十小夏まつり編 （20）	・食品ロスについて、知っていることを出し合う。 ・学習課題を設定し、学習計画を立てる。		①	①	ポートフォリオ記述 発言
	・食品ロスについて調べる。		①	①	ポートフォリオ記述 短冊
	・農家の人とつながる方法を考える。 ・農家の人とつながる準備をする。 ・農家の人に質問する内容をまとめ、ゲストティーチャーとして来てもらうお願いをする。 ・農家の人に聞いたり質問したりする。	②	②		ポートフォリオ記述 発言
	・これまでに得た情報をまとめる。	③	③		ポートフォリオ記述
	・十小夏まつりで発表する計画を立てる。 ・十小夏まつりで発表する準備をする。		④	③	ポートフォリオ記述 発言、成果物、計画表
	・活動の振り返りを行う。	①			ポートフォリオ記述
2 情報発信編 （35）	・振り返りを基に、学習活動への見通しをもつ。 ・活動計画を立てる。①		①	①	ポートフォリオ記述 発言、計画表
	・書籍やインターネットを活用して、野菜以外のロスの現状を調べる。 ・収集した情報を今後どうしたいのかを考え話し合う。	②			ポートフォリオ記述 発言、短冊
	・学級全体で目指すべき最終的な目標を話し合う。			①	ポートフォリオ記述 発言
	・今後の活動計画を立てる。②		①		
	・グループでゴールイメージを意識して情報収集する。 ・収集した情報を精査する。	②	②		ポートフォリオ記述 発言、短冊
	・ICT 機器の活用やよりよい表現方法でまとめる。 ・クラス内で発表会を行い、食品ロスの現状への理解を深める。	①	④	③	ポートフォリオ記述 発言、成果物、計画表
	・発表を振り返り、今後の活動計画を立てる。③		①		ポートフォリオ記述 発言、計画表
	・出前授業やゲストティーチャーへのインタビューをする。 ・インタビューしたことを基に情報を精査する。	①	②	②	ポートフォリオ記述 インタビュー、発言
	・インタビューを通して学んだことをまとめる。		③		ポートフォリオ記述
	・ミニ学習発表会を行う。		④	③	ポートフォリオ記述 成果物
	・発表を振り返り、今後の活動計画を立てる。④		①		ポートフォリオ記述 発言、計画表
	・これまでに集めた情報から、ゴールイメージを意識して精査する。 ・それぞれの産業や企業の工夫や努力に触れる中で、自分たち消費者ができることに着目する。	①		①	ポートフォリオ記述 発言
	・ゴールイメージ達成を意識してまとめるための活動計画を立てる。④		①		ポートフォリオ記述 発言、計画表
	・これまでに学んだことを生かし、伝える対象や表現方法を選んでまとめる。 ・まとめたものを発表する。	③	④	③	ポートフォリオ記述 成果物
	・活動の振り返りを行う。	①			ポートフォリオ記述

© 金融広報中央委員会 2022

6　単元のイメージ



© 金融広報中央委員会 2022

資料４

金融教育から起業家教育・まちづくり学習へ

～学校から広がるネットワークと構想～　　武蔵村山市立第十小学校

© 金融広報中央委員会 2022